

交通センス

長山泰久

大阪大学人間科学部
教授

Yasuhisa NAGAYAMA

Professor of Psychology
Faculty of Human Sciences, Osaka University

交通センスという言葉は交通参加者の行動を考える上で、そして交通安全教育・運転者教育を推進する上で重要なキーワードである。

よく、あの人はセンスが良いとか悪いとかいう言葉を使う。本来センスとは感覚器官による知覚能力のことであるが、センスの良し悪しという場合には「ものごとの微妙な感じに気づいたり、覚ったりする心の働き」や「事柄の感じ方、理解の仕方、あるいは表現の仕方に現われて出る心の内面にあるもの」である。

洋服や装飾品などのセンスの良さという場合には、自分の内面にあるものの表現であり、野球やサッカーのセンスの良さという場合には、その場の状況の読みの良さ、的確な判断、的確な対応を意味しているのである。

交通センスの良し悪しという場合には、その人の人間性の表われである交通のモラル、マナーの問題（たばこを窓から捨てる、人の前に無理に割り込む）など、すなわち行動としての表現の仕方の上に現われるその人の内面性を意味している。だがそれだけではなく、道路、交通、車両などの特性の持っている意味に関しての感度の良し悪しが問題とされる。特に道路交通の場で遭遇する各種の危険源に対する感受性の良し悪しは交通センスの重要部分である。

交通危険学の祖であるドイツのムンシュ氏は『若者のための危険学』という書物の中で交通センスについて次のように書いている。

「道路交通の中にある危険はできるだけ早く気づかれ、予知されなければならない。そうすることによって初めて危険を間違いなく避けて予防することができるのである。危険に気づき、予知できるためには、交通法規や標識を知っていることも大切だが、それ以上に多くのことを身につけている必要がある。そのためには『交通センス』が必要である。別の言い方をすれば、『交通の危険に対する洗練された感受性や感覚』が必要である。交通センスは丁度ジャングルに生きる人たちがジャングルを歩く時のジャングル生活センスと同じである。すなわち彼らはいつも猛獣や毒蛇に緊張しながら歩いているのではなく、まるでそんなものがないように平気で歩いているが、猛獣や毒蛇が密かに隠れて窺っているようなところになると、的確にそれを察知し、そして極端に慎重に行動する。これがまさしくジャングルに住む人たちのセンスなのである。このような能力はひとえにジャングルやそこに住む猛獣の生態を熟知して、学習し身につけた能力なのである。道路交通の中にひそむ危険を克服するためには全く同じことが言えるわけであり、『交通の世界』を熟知し、その中にある各種の『危険源とつきあい、それを支配する方法』をマスターしておかなければならない。これは教育・学習によって達成されることである」

今日のわれわれの生活では交通の場で出会う危険が最も重要である。交通の世界を熟知し、それに対しての鋭いとき澄まされた交通センスが求められる。

原稿受理 1994年2月28日